

桜井 均著

『テレビは戦争をどう描いてきたか  
—映像と記憶のアーカイブス』  
岩波書店 2005年

水島久光

2005年——終戦60年目の夏、かの戦争を題材とした数多くの番組が放映された。「特集」だけではない。ワイドショーや情報番組のレギュラー枠の中でも様々な視点から「戦争」が語られた。直接的な記憶が薄れつつあるという危機感、今日の国際情勢及び憲法論議への照射、昭和復興史の再評価、極限状態における人間——様々なコンテクストは、「戦争」がそれだけ多くの語るべき意味を内包した記号であることを、改めて我々に突きつける。しかしその一方で、100本を越えるこうした番組は否応なく60年という時間の大きさを暴露する。これらの番組たちは、あくまで「2005年夏」というくいま・ここ>から見える「戦争」の姿しか語ることはできない。ここにテレビというメディアが抱える、最大のもどかしさがある。

それだけに桜井均のこの仕事には大きな意味がある。戦後日本で制作された「戦争」に関するドキュメンタリー番組約70本について、本文444ページに亘って言及したこの「作品」は、活字化されたアーカイブとして、くいま・ここ>の制約を受けた我々の眼差しを解き放ち、相対化させてくれる力を持っている。と同時に、ここに記されたものは、この60年我々が「戦争」に対して、何をどう語ってきたかという「眼差しの歴史」そのものでもある。

桜井は、数多くのドキュメンタリー作品を通じて、日本人の「記憶」の「閉鎖性」、「他者」への眼差しを遮断した回顧——「モノログ性」を発見し、日本の「戦後」が「記録」を封じられることによって政治的に作り出されていた事実とあわせて、そこにいまだにかの戦争を総括できないでいる心的病巣を浮き上がらせる。そして一人のジャーナリストとして、誰よりも「言葉を発する位置」に立つはずのジャーナリスト自身が、このモノログに囚われ、閉ざされていたことを自戒し、告発する。一つひとつの番組に対する丁寧な検証を通じて、ジャーナリストの言説やドキュメンタリー作品それ自体の被構築性、そしてありえたかも知れない別の可能性を追いかけていく地道な作業には鬼気迫るものを感じる。

この作業はもちろん、桜井自身がドキュメンタリー制作者であるが故に成し遂げられたものである——しかし、一方で我々は、この作品が抱え込んだもう一つの「閉鎖性」に気づかずにはいられない。すなわち、この作品自体が「制作者の自意識」を辿る遍路（モノログ）なのである

「何を描いたかと何を描かなかったかの間には、つねに、何を描こうとしてどのように失敗したのかという問い以外はない。だが、何を描き損ねたかという問いは、深刻である。何を描かなかったか、ということより責任が重いからだ」（「まえがき」より）

この意識の中には、受け手は存在していない。

これが多くのドキュメンタリー制作者の中の「良心」を代表する声ならば、図らずも、この述懐は20世紀的メディアそのものの一方向性の問題を明るみに出してしまう——かの「モノログ」とは、「日本」の「戦後」の心性に帰するものではなく、その「戦後」において語り的手段として君臨してきた、テレビをはじめとするマスメディア装置の機能に支えられていたものだったとしたらどうであろうか。

ここに我々、すなわち「テレビを見る者」の仕事が生まれる。「テレビ制作者」というハビトゥスが、「何を描こう」とし、また無意識のうちに「何を描く対象から排除し」、また意識をせずに「何を描いてしまった」のか——という点を掘り起こすこと。そしてそれを「送り手」と「受け手」の対話の場に晒すこと。このことによって初めて、映像が担う「記録」「表象」と人々の「記憶」「日常的な語り」の関係を問うことが可能になる。

事実いま、これだけの膨大な番組のどれほどが果たして視聴者に届いたのだろうかという疑問、また今日のデジタル化されたメディア技術

によってますます「記録」が容易に再現・構成されうるものとして扱われる傾向の中で、テレビ・ドキュメンタリーは何をすべき／できるのか、大きくその存在意義が問われている。この「作品」はその意味で、けっして過去を振り返るためのアーカイブに留まるものでない。我々はこの中から、テレビというメディアの将来を展望するための視座を発見しなくてはならないのだ。

奇しくも桜井は「あとがき」において、アーレントの『イェルサレムのアイヒマン』に言及し、「戦争」におけるシステムと人間の責任との関係を問う必要性を主張する。我々はそのにさらに、桜井が「根源的にならざるを得ない」というテレビ・ドキュメンタリーそのものに対しても、メディア・システムと制作者の責任との関係を問うラディカルな眼差しを注ぐのだ。このことによって初めて我々は、テレビとともに生産／再生産されてきた「戦後」史を、ようやく理論的考察の射程に収める手がかりを得ることができるのである。



水島久光 (みずしま ひさみつ)

1961年生まれ、東京大学大学院学際情報学府修士課程修了

【専攻領域】メディア論、情報記号論

【著書・論文】

『閉じつつ開かれる世界』勁草書房、2004年

「メディアと公共性の原理の現在——パブリック・システムとしての放送を再考する」、『マス・コミュニケーション研究』No.65、pp.5-27、日本マス・コミュニケーション学会、2004年

「パラエティ化する日常世界——(いま・ここ)にあるヴァーチャル・リアリティの記述方法」、『放送メディア研究』No.3、pp.213-254 NHK放送文化研究所、2005年

【所属】東海大学文学部

【所属学会】日本マスコミュニケーション学会、日本記号学会、情報通信学会